

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12795

研究課題名（和文）ヴァールへ応答するレヴィナス：レヴィナス哲学再解釈の試み

研究課題名（英文）Levinas's response to Jean Wahl : An attempt to reinterpret Emmanuel Levinas

研究代表者

樋口 雄哉 (Yuya, Higuchi)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：40823034

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：エマニュエル・レヴィナスの哲学をフランス哲学史という文脈において捉え直す可能性を探るため、本研究はレヴィナスの思想とジャン・ワールの思想を比較し、その類似点と相違点を検討した。両者の哲学に共通する「多元性」「瞬間」「超越性」などの概念を中心とした比較作業を通じて、レヴィナスがヴァールの問題をどのように継承しているのかを明らかにするとともに、レヴィナス哲学の独自性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第一に、ヴァールの思想を主題とする研究が不足するなかで、彼の哲学の構造と根本問題をある程度の解像度で明らかにしたという点、第二に、これまで何らかの影響関係が想定されていたヴァール哲学とレヴィナス哲学のあいだの思想的繋がりを明らかにしたという点にある。

研究成果の概要（英文）：In order to explore the possibility of reconsidering the philosophy of Emmanuel Levinas within the context of the history of French philosophy, this study compared the thought of Levinas with that of Jean Wahl, examining their similarities and differences. Through a comparative analysis, mainly focusing on concepts such as "plurality," "moment," and "transcendence" shared by both philosophies, it became possible to elucidate how Levinas inherits Wahl's concerns, and to demonstrate several distinctive aspects of Levinasian philosophy.

研究分野：フランス哲学

キーワード：ジャン・ヴァール エマニュエル・レヴィナス 超越 瞬間 多元性

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、レヴィナス哲学の哲学史上の意義を主題とする研究の多くは、現象学に定位するものであった。たしかにレヴィナスの哲学的キャリアの出発点には、ハイデガーに関心を寄せつつ進められたフッサール研究があるし、それ以後の彼の思想も、常にフッサール哲学とハイデガー哲学を重要な参照軸としつつ展開されている。しかしながら、レヴィナスは自らの哲学の射程を現象学的問題構成に限定しているわけではない。したがって、レヴィナス哲学の意義を正當に評価するためには、より広い視座を確保する必要がある。

また、現象学以外の背景からレヴィナスの思想を説明づけるという課題に対して、これまで重要な役割を果たしてきたのが、ユダヤ思想史的研究である。この研究は、現象学史的アプローチが見過ごしてきたレヴィナス哲学のユダヤ性を解明した点に、大きな貢献がある。しかしながら、この研究が明らかにするレヴィナスの宗教的背景は、レヴィナス哲学がフッサールやハイデガーの現象学に対して保っている隔たりの意味を十分に説明するものではない。というのも、現象学に収まらない思考がすべて、宗教的思考であるわけではないからである。

レヴィナスを「現象学者」ないし「ユダヤ思想家」として扱うこれらの解釈は、彼が「20世紀フランスの哲学者」でもあったという事実、特に20世紀前半のフランスにおける哲学的状況のなかで思想を形成した哲学者だったという事実に必要な注意を払っていない。そして、既存の研究が、レヴィナスの非現象学的な哲学的寄与を、そして延いてはレヴィナス哲学全体の射程を精確に評定できていないのは、「20世紀前半のフランス哲学」というこの第三の文脈を見過ごしているからだと思われる。そこで本研究は、この文脈からレヴィナス哲学を捉え直すことによって、レヴィナス哲学に新たな側面から光を当てようとした。

## 2. 研究の目的

本研究は、20世紀フランスの哲学者のなかでも、1960年代までのフランス哲学界において大きな影響力をもち、またレヴィナスとのあいだに親密な交流があったことも知られているジャン・ヴァールに注目した。そして研究の目的を、レヴィナス哲学とジャン・ヴァール哲学とを比較することによって、レヴィナス哲学をヴァールへの応答として再解釈することの可能性を検証することに設定した。この研究は、20世紀前半のフランス哲学をレヴィナス哲学の新たな解釈軸として確立することを目標とした。また本研究には、ヴァールとレヴィナスを例に「フランス現象学者」以前の哲学者たちと「フランス現象学者」との影響関係が明らかになることによって、長らく過小評価されてきたヴァールらの世代の哲学史的意義について再考を促すという波及効果が期待された。

## 3. 研究の方法

本研究は、「多元性」、「瞬間」、「超越」の三概念を軸に、レヴィナスとヴァールの哲学の比較を進めることにした。なぜならこれらの概念はそれぞれ、いずれの哲学においても、少なくとも一時期は、重要な主題の一部をなしているように思われたからである。ただし申請時には、ヴァール哲学を主題とした先行研究が不足しており、ヴァールの哲学が何を課題としその課題にどのような解答を与えようとしたものなのかという一般的理解が、哲学史研究者のあいだで共有されていなかった。そこで本研究は、1)ヴァールの哲学的テキストを渉猟しつつヴァール哲学の根本的な課題と方法、主張を解明する作業を進めつつ、2)「多元性」、「瞬間」、「超越」の三概念それぞれがヴァールの哲学においてどのように位置づけられるかを順に検討し、3)その都度レヴィナスの哲学をヴァールの哲学と突き合わせる、という仕方で行うことにした。また、1)と2)の作業のための資料として、フランスの現代出版資料研究所(IMEC)ヴァール文庫での草稿調査やフランス国立図書館(BNF)を通じた雑誌論文の収集を中心に、ヴァールの一次資料の収集を行った。

## 4. 研究成果

研究初年度である2020年度からのCovid-19パンデミックにより、1年目と2年目に行う予定であったフランスでの資料収集を延期するなど、研究計画を変更する必要が生じた。申請時には、「多元性」、「瞬間」、「超越」の順で一年ごとに主題を設定する三年間の研究計画を立てていたが、結果的に、扱う主題は「超越」、「瞬間」、「多元性」となり、また研究も四年間に及ぶことになった。

四年間の研究によって、ヴァールの哲学の基本的な性格が明らかになるとともに、この哲学に対して、レヴィナス哲学がどのように位置づけられるかについても、一定の答えを得ることがで

きた。

ヴァールは実在を、思惟をはじめ主客構造の経験において出遭われる対象を超えた「出来事」であるとする。経験は常にこの実在を目指してはいるがそれに届かず、したがって実在は経験にとって超越者であり、また実在を目指す経験は運動としての超越である。経験が超越者としての実在を目指しているという事実は、ヴァールによれば、哲学史が総合を欠いた弁証法という形式をとるということによって証示されている。だが他方でヴァールは、人間が「出来事」としての実在に常に巻き込まれているとも考え、このような実在への参入を「超関係的経験」、「関係の下方の経験」などと呼んでもいる。またヴァールは、実在と交わるこの「経験」の様式が感情であるとも主張し、そこに主客構造を前提とした主体としての自我とは異なる自我の成立を想定している。したがってヴァールの哲学は、それ自体が、超越と超越の否定との弁証法の体をなしている。ヴァールにおいて超越、瞬間、多元性といった概念は、内在、持続、一元性といった対概念によって補われることになる。

ヴァールの思想を念頭にレヴィナスを読めば、少なくとも『全体性と無限』までのレヴィナスが、ヴァールの思想を下敷きにしていたことがわかる。レヴィナスは、主体と無限が、たがいに分離されつつ、それでも関係を結ぶその仕方を、「自身が思惟する以上に思惟する思惟」による超越者への「接近」として理解しようとするが（*Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, 4ème éd., Martinus Nijhoff, 1980, p. 33）、ここで考えられている関係は、ヴァールが「超越」という術語のもとで考えていた関係と一致する。だがレヴィナスは、この「接近」の運動の終息が可能であるとは考えない。形式的に言えば、レヴィナスの哲学は、ヴァールの弁証法のうち、超越の方を選び、他方を放棄するものだと言える。

他方で、本研究を通じて、ヴァールの哲学には、ベルクソン哲学を踏まえながら、フランス哲学史および哲学史一般を整理し直すという、根本的な問題意識があったことが明らかになった。とりわけヴァールにおいて重要だったのは、ベルクソンの連続性の哲学と、フランスにおいてヘーゲル主義への反論として現れた非連続性の哲学との調停という課題だった。ヴァールの哲学における超越と内在、多元性と一元性、瞬間と持続の弁証法は、この課題に対する一つの解答であると理解できる。今後は、ヴァールの哲学を媒介にしてレヴィナス哲学を哲学史の中に置き直すことにより、レヴィナスの哲学的意義に関する新たな理解が得られるものと期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 136
2. 論文標題 コッチャの哲学における連続性と非連続性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 65-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/0002000506	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 12
2. 論文標題 アンリとヴァール、近さと隔たり	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.12.0_41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 3
2. 論文標題 経験と形而上学--ヴァールとレヴィナス--	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 32-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 44
2. 論文標題 愛なきセックスの世界--金塚貞文のオナニー論をてがかりに--	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社哲学年報	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 71
2. 論文標題 ヴァールにおける瞬間と時間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化学年報	6. 最初と最後の頁 257-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 樋口雄哉
2. 発表標題 アンリとヴァール：隔たりと隔たりのなさ
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口雄哉
2. 発表標題 経験と形而上学--ヴァールとレヴィナス
3. 学会等名 日本レヴィナス協会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 川瀬雅也、米虫正巳、村松正隆、伊原木大祐編、樋口雄哉ほか著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 350
3. 書名 ミシェル・アンリ読本	

1. 著者名 レヴィナス協会編、樋口雄哉ほか著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナス読本	

1. 著者名 杉村 靖彦、渡名喜 庸哲、長坂 真澄、樋口雄哉、他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------